# I.Q.と天才と——*Flowers for Algernon*——

片　岡　恵理子

目次

序論
第1章　(1)　"I want to be smart"
　　(2)　"what I.Q. is"
第2章　"Why am I so alone in the world"
第3章　"You've changed"
結論
注
参考資料とコピー

他人が自分より優れていたり、物事を多く知っていたりすると、その人を自分より「頭が良い」や「賢い」と感じることは、ないだろうか。他人に対し「頭が良い」や、「頭が悪い」などの判断を下すことは、ないと言えるだろうか。

専門的な知識によることなく、他人に対しこのような判断を下す時、その基準は何だろう。

このようなことを考えるために、なぜダニエル・キイスの『アルジャーノンに花束を』(Flowers for Algernon) を選んだかは、以下の通りである。

本書の主人公であるチャーリーは、知能を上げる外科手術によって、知恵遅れの状態から、天才的なI.Q.にまで到達することになる。

その過程における、チャーリーの考え方に、私は注目してみた。

そして、天才的なI.Q.に到達したあたりの彼の考え方や苦悩は、高いI.Q.をもつ人のそれではなかった。

I.Q.には、いろいろな考え方がある。定義としては、3～5つ程に大別されるのだが、その解決の仕方によっては、かなり広い意味合いのものから、狭く限定されたものもある。

そして、私が、本書を読み進めたところ、チャーリーは、ある意味では、高いI.Q.をもっているとは、言えなくなるのだと気付いた。

また、そのある意味とは、私がI.Q.の定義について調べた中で、ある程度、私の中でまとめあげた、ひとつの考え方ということである。

その結果、わかったことは、本書のチャーリーを「賢く」はなっていないと考え、彼のI.Q.に対し、ある批判を持ち出すことは、ＳＦのみならず、現実の世界における「頭が良い」という表現をも批判することになるということだった。

私の卒業論文は、これらの事を、なぜそうなるのか、わかるように構成したつもりである。そのため、第1章が、本論のための序論になっている。本論は、第2章である。第3章は、結論を述べるにあたり、必要な内容でありながら、第1、2章に組込まれるべきではないと判断された内容が、ひとつのメモのように、述べられている。序論から第3章までは、本書を主体としたものである。結論は、序論から第3章までの内容から出た、私の考えと意見が主体となっている。　　(指導教員　中村　敦志)